

3885 地球のかおり：「出航の朝」(産経新聞)・心模様

カナダ東部、東に西に、南に北に。
大西洋から五大湖に至るセントローレンス川沿いを西から東へ。
ナイアガラ、トロント、キングストン、モントリオール、
トロワ・リヴィエール、ケベックシティ、
さらに、対岸のケベック州、最東端、ガスペ半島のガスペまで。
開拓者とは逆のコースを走破した時のこと。

俗に、ナイアガラとケベックシティ間、約 800 キロは、
メープル街道と呼ばれる東部落葉樹林帯。
私が訪ねたのは、北半球が秋になる頃だった。
ポプラやブナ、シナノキ、白樺、サトウカエデ（メープル）が、
東部全域を染め上げる頃、最高だった。
ゆっくりと旅らしい旅をして、中間位置のモントリオールに戻った。

旅の時間は充分ある。そして、南北への旅。
すでに南部は、アメリカとの国境、前回、越境している。
今回は、モントリオールから、モンテベロ、北をめざした。

モントリオールの北部には、ロレンシャン高原が広がる。
その最北端に、トレン・ブラン山がある。標高はそう高くない。
さらに北上した。そこは、森と湖水の雄大な大自然。
アウトドアライフに興味を持つ人には、最高の地だろう。
喜び勇んで訪ねたものである。

そして、眼前の霧走る湖水との遭遇。
メープル街道での、赤や黄色、褐色、そのモザイク、極彩色の
紅葉の美しさを目にしている。そのギャップ。

紅葉の時は短い。北上し、道草しながら、何泊かした。
北上するごとに冷え込む。
早朝の体感温度は、晩秋というより初冬。
宿を夜明け前に出発。昨夜の天気予報では、快晴の予報。
気負い立ってというより、紅葉を楽しめれば最高。
それ以上の景観にお目にかかれるとは、思いもよらなかった。

カナダでは、湖水が星の数ほどあると言っても過言ではない。
最初、湖がある程度の認識だった。
すこし車を走らせ、水でも口にするかと一休み。
テープをかけた。カラヤン指揮のクラシック・ペールギュント。
幸い、周囲に家もなさそうなので、窓を開けた。
なんとも心地よい風を頬に感じた。そんなに寒くは感じない。

どの^{あた}辺りにいるくらいは、確認する必要がある。
地図を開けた。右に行くか、左に行くか、この時間が、結構楽しい。
すこし、風が出てきた。肌に風を感じる。
耳からは、心地よい音楽。何気なく顔をあげた。
嘘だろう。耳にイメージするかのような光景が、眼前で展開されそう。
車から飛び出した。

地球があたたまってきたのか、霧が走り出した。
風が吹く方向も良かった。ラッキー・スマイル、強運がつづいた。
海外では、動態の動きを意識して、
35 ミリカメラを何台か、携帯することが多くなってきている。
今回は、単体レンズの6x7カメラや、大きく重い安定した三脚も持参。
万全の態勢で来ている。(余談・三脚だけの重量5.6キロ)

ひとり旅。60キロからの荷物は大変。
日本を出発する前に、持参するか否か、悩んだものである。
と言うのも、その時、鎌倉の禅寺・円覚寺に座住。

北鎌倉駅の前に、円覚寺がある。JRは、境内を通過している。

私の庵は、一番奥にある。普通なら5～6分の上り坂。

舗装されていないデコボコ道だった。トランクのキャスターも役に立たない。

行きは良い良い、帰りは怖い。訓練はしているが、

疲れると、その重さは肩に食い込み、手もしびれるほど、

何往復して、庵に荷物を運び、庵に着くとバターン。

体験した人しかわからないだろう。訓練はしているが、追いつかない。

なぜか、今回持参していた。長期の旅だった。

もしかしたら、一期一会のチャンスがあるかも知れない。

移動は大変だが、今回は、レンタカー。

車に掘り込めばいい。ドライブ、アンド、パークの旅のスタイル。

そして、街の散策、トレッキングや時に登山に出発。

貴重品や必要な荷物は背負って出かけることにしている。

あまりの荷物の多さに、汗を拭き拭き、移動している時。ある外国人から、

ユーアービッグファイターと言われた。

自分では気づかなかったがそう見えたのだろう。おかげで得をしたこともある。

不必要なものは、座席の下やトランクの奥に、

外から見えないように、余分な想像をさせないように工夫して、

それでも盗難に遭うらしい。私はその経験がない。

余談だが、海外での荷物は、私には、大きな問題である。

今回は、小型カメラ本体3台、レンズ類もある。中型カメラに、大きな三脚。

眼前の霧走る湖水。この微妙さは、中型カメラと三脚が必要。

偶然持参、すべての条件が整うという超ラッキー。

まさに、スマイルオンミー。

偶然か、必然か、一期一会、それとも、奇縁の糸に結ばれているのか。

こんな不思議なことが世の中にはある。

好循環、悪循環、いい時もそうでない体験もしている。

今も、出来ることしか出来ないが、夢挑戦、継続させていただいている。

いろいろな人のサポートがあつての今日。感謝の言葉しかない。

話が横道に、本題に戻って・・・

その後の至福の時間。寒さや眠気も吹っ飛んだ。

船影が遠方にも、かすかに見えるように、刻々と場面が変わる。

かたずをのんで待ち構えた。

どの瞬間を切り撮るか、久楽流は、パチパチ撮らない。情報発信というより、心象アート。機械が撮るのでなく、私の感性の合図で撮るのが久楽流。

あとは言葉がいらないだろう。

このモチーフの取材ができ、和紙夢絵に創作したのは言うまでもない。

額装だけではもったいない。

表現上、テカリや無機質が好きになれない写真だが、このモチーフだけは、和紙の方がいいが、写真でも良いと自画自賛。

素晴らしい作品になった。

たかが一つのモチーフと思われるかもしれないが、

私には価値があるもの。

汗をかきかき、厳しいのぼり坂を、のぼりきってこそ、

素敵な景観が見られるというもの。結果を残すのも大切と感じた。

しかし、結果を残すために、意識や知識が優先すると

感性がお留守になる。この作品は、後々まで、手本になっている。

もっと、ロマンや旅情、詩的なタイトルがあれば・・・

暫定的に「出航の朝」と。